

特集 くずし字を読もう！

市史の編さんにはさまざまな種類の古文書こもんじょを読み解いていくことが必要です。古文書といえば、ぐにやぐにやとした“くずし字”で書かれていて、読み慣れていない人には難しいのではないのでしょうか。

そこで今回の特集では、古文書に親しむ第一歩として、目にすることの多いくずし字を紹介します。ちなみに古文書は、江戸時代の研究だけでなく、近現代史や民俗学、また意外にも自然科学の分野でも活用されていて、それらに基づくデータが研究に役立っています。(→5ページ資料紹介)

問題 史料中の番号が付いた文字を①～⑦の順に並べると、ある「言葉」が出来上がります。答えは特集の最後に！



人の名前を

読む



左の史料には、5人の男性の名前が書かれています。

昔の人の名前はある程度パターンが決まっています。そのため、字の予想がしやすく、くずし字の中でも読みやすいといわれています。

トはカタカナの「ト」のように見えますが、「郎」の字がくずされ極力省略された形のもので。

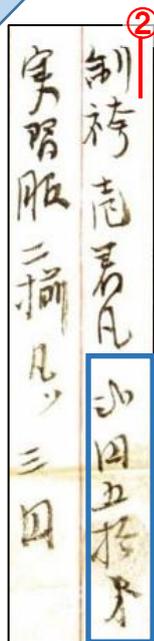
蔵は「蔵」の字です。蔵-花-花のようにだんだんくずされていったものです。

あは「あ」に似ていますね。「安」の字をくずしたものです。

この5人の名前は、右から順に「鈴木八五郎」「栗原与助」「柴田市蔵」「小作安吉」「並木周助」と書かれています。

金額を

読む



左の史料は、明治期の学校制服の費用を記したものです。青線で囲んだ部分は金額を示しています。

漢字の表記については、現在の常用漢字と異なる形はあるものの、そのパターンは限られていて、漢数字とその下に貨幣の単位が書かれていることがわかれば、それは金額を記しているということがわかってきます。

明治4年(1871)に発布された新貨条例により、当時の貨幣の単位は「円」「銭」「厘」でした。枠内1文字目の「弍」は漢数字の二、4文字目の「拾」は漢数字の十と同様に用います。

𠄎は、金偏かねへんが省略されて右側部分のみになった「銭」の字です。頻出の字ですが画数が多いため、よくこのように省略して書かれます*。

昔はお金の単位も違ったんだね！



* 省略された「銭」の字は、銭が通貨単位として採用された明治4年から、昭和28年に廃止されるまでの間に主に用いられた。

(山下 真里「銭」の異体字「[セン]」の盛衰とその要因(『日本語の研究』第9巻4号, 2013)

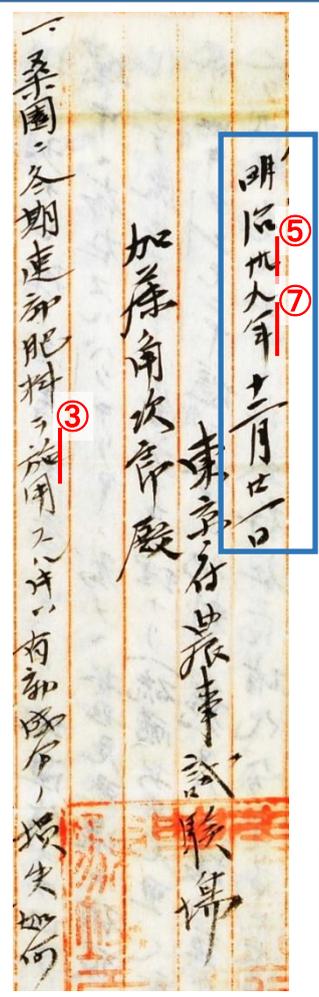
日付を

読む

手紙や公的な書類には、必ず日付が書かれています。
 左の青線で囲んだ部分の日付を読んでみましょう。
 最初の2文字は元号で、「明治」です。

しかしその次の **卅** と、十二月の下の **廿** は見慣れない文字です。
 実はこれらの字は、それぞれ「三十」「二十」の漢数字です。漢数字の十が2つくっついた形なので「廿」、3つだと「卅」といった具合です。下の横棒は、あったりなかつたりします。

つまり、この日付は「明治三十九年十二月二十一日」ということになります。
 また、「月」や「日」は省略されることも多く、「口」や単なる点のように書かれていることもしばしばあります。



日付の後には、差出人と宛名が書かれているりん！

手紙文を

読む

家族や友達からの手紙を大事にとってあるんだね



女性が手紙や日記などで用いたのは、かな文字を主とした文体です。
 漢字ばかりの公文書類より、現代の文体に近いので、少し読みやすいものとなります。

右の明治期の史料は、ある女性が姉妹とみられる親しい間柄の人物に宛てて書いた手紙の一部です。

青線で囲んだ部分は、「先日ハ西多摩郡教育運動會(會)青梅小学校ニ於て實(実)行致され〜」と、最近あった出来事を報告しています。

手紙文は書かれた当時の日常のようすがわかるので、今読んでも面白い内容が多いのも魅力です。

古文書を読むには、時代背景や文書の残された家・人の経歴だけでなく、当時の人間関係や政治、農業、商業といった各分野の知識が必要となります。それらの知識をフル動員させ、調べながら解読するのは大変な作業ですが、その分、読めたときの喜びも大きいものです。

さて、みなさん冒頭の問題は解けましたか？

答えは **市制施行卅周年** (市制施行三十周年) でした！

平成3年に市制を施行した羽村市は、令和3年11月1日に30周年を迎えます。



※掲載資料は、いずれも市内に残されていた明治期の史料(個人蔵)です。

部会と市史編さんの足あと

[7月] 第5部会(民俗部会)の資料返却を行いました。

[8月] 部会長会議を開催し、本編に向けての意見交換を行いました。

[9月～] 市制施行30周年記念誌の刊行に向けて編集作業を進めています。原稿の作成のため、部会内で情報を共有しました。市史編さんに関わる調査を振り返り、改めて写真の整理を行い、調査風景の写真を選びました。そのなかで、調査中の出来事やさまざまな出会い、楽しかったことや苦労したことなどが思い出されました。

「伸びゆくはむら」バックナンバーについて

以下の場所でご覧いただけます。

- 市史編さん室(市役所西庁舎3階)
- 羽村市図書館(3階地域資料コーナー)

このほか、羽村市公式サイトでもご覧いただけます。

▼公式サイトは
こちらから



表紙の写真 木箱とくずし字



写真の木箱は市内個人宅の蔵の中に保管されていた資料です。

「明治42年書類」と書かれたこの箱には、明治から大正にかけてのさまざまな書類が収められていました。中からは桑の管理や購入、蚕種購入のやりとりといった家業の養蚕に関するもの、消防やお堂の管理など地域に関するもの、その他にも手紙や領収書の綴りなどの書類が見つかりました。これらの記録はくずし字で書かれており、今号ではこのくずし字を共通テーマとして各コーナーの記事を掲載しました。

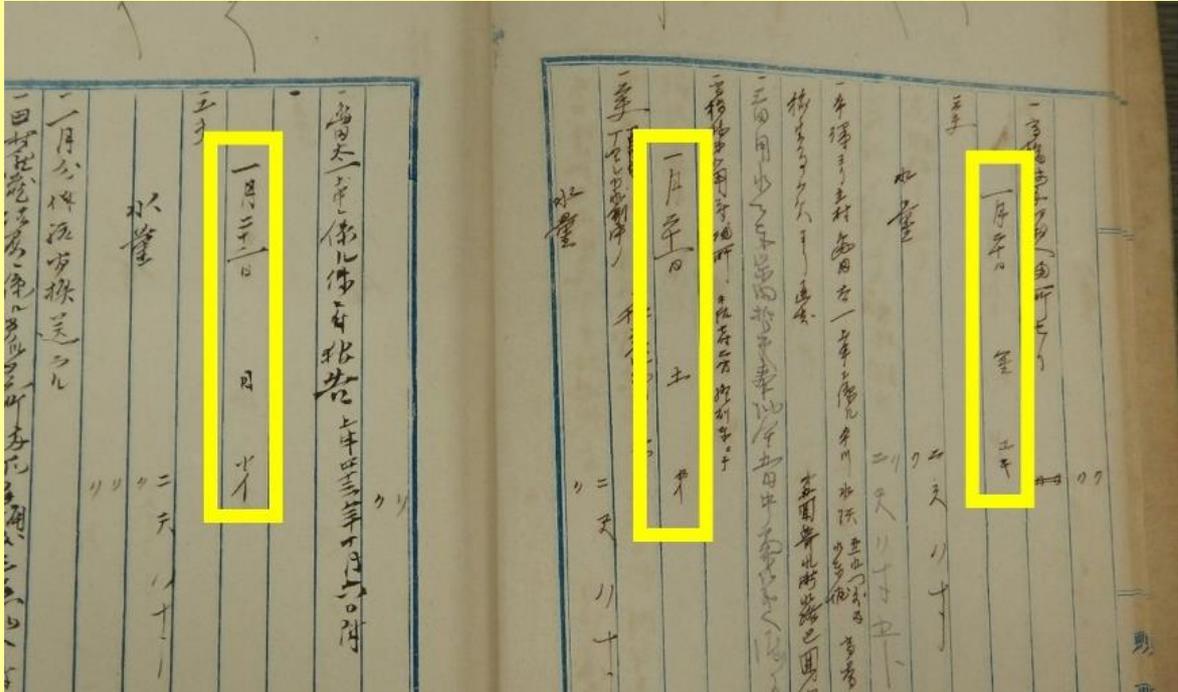
表紙の、木箱から浮かび上がってきている文字の中には、記事の中に登場したくずし字も含まれています。あらためて見直して、見つけてみてください。

資料紹介

今回紹介する資料は、『羽村市史 資料編 自然』から取りあげました。

「図 12-1 雨倉家（川崎）の養蚕日誌（上）と羽村日誌（下）における天気の記述例」より羽村日誌を抜粋

（『羽村市史 資料編 自然』278 ページ）



写真は、羽村取水堰を管理する役人が日々の堰管理や業務内容を記録した『羽村日誌』（1869～1924年）の中から、明治44年（1911）1月のとあるページを写したものです。

『羽村市史資料編 自然』では、日記や日誌に記録された天気から、過去の気候をさかのぼり、羽村の長期的な気候変化を調べました。現在のように電子データのなかった時代、記録は紙で残されていました。『羽村日誌』のような古文書に記された天候記録は、気象観測測器によるデータが得られるようになる前の、先人が残した貴重な記録です。

私たちが日記をつける時、日付や曜日に続いてよく天気を記します。写真の枠の中にはそれと同じように、日付などに続けてその日の天気が記されています。加えてこの日誌には水門の水量の管理・記録が残され、他のページには修復工事のことや、拝島（昭島市）までの玉川上水の巡視などの業務報告、また現場作業員の仕事内容や出勤廃休※までもが記録されています。

さらに業務内容とは別に、丸山下（堰の対岸）

で製氷がされていたことや、台風の襲来や積雪量のこと、関東大震災時の地震の揺れや被害の有無などの記述もあり、当時の様子をさまざまに知ることができます。

第4部会では、この『羽村日誌』に加えて市内に残された古文書・農業日誌・養蚕日誌などからも天気の記録を抽出しました。このように気候記録をたどることを歴史気候研究といいます。古文書を取り扱うので歴史学かな？とも思いますが、自然科学の一分野にあたります。

『羽村日誌』の歴史気候記録からは、11月下旬から2月頃にかけての連続した晴天日や、雨天日と曇天日が梅雨期・秋雨期に連続していること、降雪日は12月中旬から3月中旬頃に多くみられることなど、当時の天候が近年の天候の特徴と大きく異なるものではないことがわかりました。

このように現代に残された古文書は、過去を知るための貴重な手がかりなのです。

※休日出勤のこと。



News

羽村市は令和3年(2021)11月1日、市制施行30周年を迎えます。

現在、市史編さん室では市制施行30周年を記念した冊子の作成に取り組んでいます。

これまでに刊行した6冊の『羽村市史資料編』の中から、見どころとなるトピックスを抜き出して一冊の冊子にまとめていきます。これらの紹介を中心に、これまでの市史編さんの過程で得られた成果や調査でのこぼれ話なども掲載し、平成3年から令和3年までの羽村市の30年を振り返っていこうという企画です。

この他にも30年間の出来事を記した年表や、羽村の四季を彩る風景の写真など盛りだくさんの内容で刊行します。記念誌の内容は、市公式サイトにて公開する予定ですのでお楽しみに。

コラム

ちっとんべえ

第27回「時候の挨拶」

今日はみなさまにお手紙をお届けします。



拝啓

空高馬肥の候

「伸びゆくはむら」をご覧のみなさま、いかがお過ごしでしょうか。今号では「さまさまな」くずし字を紹介しましたが、この手紙の冒頭の「くずし字」は、解読できたでしょうか。実はこれ、今でも使われている時候の挨拶なのです。

以前、資料目録の作成中に、この文字が書かれた手紙を見つけました。パツと目に飛び込んできたのが「馬」と「肥」。

私はこの2文字にとらわれ、

「馬の堆肥？ 水分の少ない馬糞が肥料になるの？」

牛や豚ならともかく……と

先入観のままに、実際に馬糞が肥料に使われていたのかどうか調べようとしていました。

そのとき、ふっと手紙から距離をおいてみると……。

突然、前後のくずし字が「空」「高」と「候」の文字として浮き上り、瞬間的に「空高馬肥の候」だと理解することができました。

「読めた」というより「見えた」のです。

その時の達成感といったら！まさにアハ体験。

至近距離でじっくり向き合うだけでなく、こんなふうに少し距離をおいてみるとまた新たに見えてくるものがある、意外と何事にも当てはまることかもしれません。

(九月)

ち

敬具

※文頭・文末の筆文字は、手紙（市内個人所蔵、明治40年頃）の一部を、原文まま転載したものです。

※「ちっとんべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。